

## 2020 年度 学位記授与式

教授 村井 基彦

令和3年度は、対面の会合や行事でも、人を時間と場所に拘束することが目的ともいえるようなものはオンラインへのシフトや淘汰が進んでいったと感じます。対面の価値と同時にオンラインやリモートの価値もまだまだ揺れていると思います。

大学としても、昨年度に比べると、行事が対面で実施されるものが少し戻ってきました。大学全体の卒業式・修了式もその一つになり、3年ぶりに対面で、しかもパシフィコ横浜で実施されました。これは横浜体育館が改修中とのことで、またこれからもパシフィコ横浜ということではなさそうです。

理工学部各 EP と大学院の各ユニットの学位記授与式は、昨年度に引き続き、【1度に50名以上の人数を集めない】、【できるだけ短時間】、【対面での接触を減らす】の徹底のもとで実施されました。卒業生42名は14時半からの学部学位授与式、修了生24名は15時半からの大学院学位授与式の時間帯に分かれ、座席指定、学位記等は原則として代表者のみが直接授与という形式での学位記授与式となりました。



図：(左) 代表者のみが学位を直接授与



(右) マスクでの集合写真

また卒業生・修了生以外の参加の禁止に加えて祝賀会等の自粛の強い要請もあり、今年も学位授与式での弘陵造船航空会会長による祝辞、同主催の祝賀会については見送りとなりました。

学部卒業生の学位記授与式では、開会の辞に続き、代表者への学位記授与が EP 代表の上野教授により行われました。学位記授与に続き、日本船舶海洋工学会奨学褒賞、日本航空宇宙学会賞学生賞、弘陵造船航空会賞、船舶海洋工学賞がそれぞれ1名ずつに贈られました。

各賞の授与に続き、教室主任の川村教授から式辞が述べられました。式辞では初代校長・鈴木達治先生が提唱された【名教自然】を引用しつつ、「与えられたことをするだけではな

く、『いろいろなことに興味を持って自発的に取り組み、新しいことを常に学んで行くこと』は、皆さんの将来を豊かにするためのキーワードであり、また新しい社会を作り上げていく手段になると思います。社会に出ても、是非、自発的に学ぶことを続けて行って、自分の世界・視野を広げて行っていただければと思います。』というメッセージを伝えられました。

式辞の後、閉会の辞をもって、学部卒業生の学位記授与式は 20 分弱で終了し、卒業生は学位記を手に速やかに船舶海洋工学棟玄関に移動し、記念撮影をもって解散となりました。

大学院修了生の学位記授与式の流れは卒業生の学位記授与式に準じたもので、司会は大学院教務委員の宮路准教授、学位記授与はユニット長の川村教授が行いました。授与式は 15 分程度で終了し、記念撮影後に解散となりました。

この 1 年、キャンパスに来ることがほとんどなかった・あるいは限られた場所・時間帯しか大学での滞在が許されなかった卒業生・修了生にとって、学位授与式では本当に 1 年ぶりに対面で声を交わした卒業生同士も多かったと思われます。今年度卒業・修了した同期が屈託なく集まり、ワイワイと遠慮なく語らえる機会が訪れるよう、同期のつながりを保ち続けてくれることを心から思います。